



市読書感想文コンクール 市長賞受賞作品紹介

毎年開催している市読書感想文コンクールは、今回で47回目を迎えました。市内の小・中・高等学校から寄せられた112編のうち、市長賞を受賞した作品を紹介します。



★小学校中学年の部

小がた化しているカブトムシ



高津小学校 4年
柴田 翔太 さん

ぼくは、生き物が好きだ。特に、カブトムシがすきで毎年カブトムシのよう虫を買ってもらったり、もらったりして育てている。この本には、「カブトムシが小がた化している？」と書いてあった。ぼくも、そう感じていたので、この本を読んで、その答えを知りたくなった。

こん虫カメラマンの山口さんが、近ごろ、指先に乗るほどのコガネムシくらの小さな「豆っこカブトムシ」を見かけるようになって、そのぎ間を色々さがしていくという内容だ。

本を読んでみると、「カブトムシのよう虫がかたい木の根の中から出てきた」と書いてありぼくはおどろいた。なぜなら、前に読んだ図かんには、カブトムシのよう虫はふ葉土の中にいるとかいてあったからだ。だから、ぼくはカブトムシを飼うときは、いつも水そうの中にふ葉土を入れ、それからよう虫を入れている。よう虫は、フカフカのふ葉土がすきで、それを食べて大きくなると思っていた。でも、「もともとカブトムシは、山お

に住んでいたから、よう虫はかたい木も食べていた」ということが分かった。ほくの中のカブトムシのよう虫のイメージがどんどん変わっていった。カブトムシのよう虫は、さわるとやわらかくて気持ちがいいけど、口だけとてもかたい。なぜかいつも不思議に思っていたことが一つ分かった。

また、同じ日本でも林は二つに分けられるということをはくは初めて知った。ぼくたちのいる西側は、冬になっても葉を落とさないしやう葉じゆ林とよばれている。昔の人々は、ごはんをたいたり、お風呂をわかしたりするのに炭やまきを使っていて、そのため木をとるために、ぞうき林を作っていた。人のつくったぞうき林はカブトムシにとって住みやすく、えいようもほうふで大きくなっていった。でも、ぞうき林にたよらなくても生活できるようになった人間は、木や草かりをしなくなり虫の住みやすいぞうき林は消えてしまい、そしてえいようがなくなつて、カブトムシは小さくなつてしまったと山口さんは書いていた。カブトムシのことを考えずに、人間の都合で大きくなつたり、小さくなつたりしていると分かり、かわいそうだと感じた。小さいカブトムシの出げんは、もとの大きさにもどつただけかもしれないけれど、人間のせいだ、ごめんと思った。

ぼくは、カブトムシがたくさんいる山なしのおく山に行つて、カブトムシの様子を実際に調べたくなった。人間の生活

が便利になつたため、ぞう木林が利用されなくなつて、カブトムシたちは、元々いたおく山に帰っていった。ぼくたちの生活が、カブトムシを大きくしたり、小さくしたりしているとはゆめにも思わなかった。ぼくのしよう来のゆめは、こん虫学者になることだ。カブトムシについていろいろ調べて、カブトムシが生きやすいように山を守つていきたいと思う。

※読んだ本「カブトムシ山に帰る」
山口 進(汐文社)

★小学校高学年の部

原爆の火



吉田小学校 6年
藤本 隆司 さん

八月六日、今年も平和記念式典がテレビで放送されました。ぼくの住んでいる益田市でも、黙とうの案内放送が流れ、一分間目を閉じました。何のために毎年黙とうするのだろうと考えているうちに一分が経ちました。

七十二年前、世界で初めて広島に原子力爆弾が落とされ、多くの方が亡くなつ

たことは知っています。でも、その時の状況や、七十二年経った今でもなぜ記念式典や黙とうをするのかについてはよく分からないまま、ここ何年もテレビ放送をなんとなく見ていました。そんな時、図書館でこの本の題名が目飛び込み、すぐに手に取って読みました。

当時軍隊に入っていた山本さんは、汽車の中で、原爆にいました。そして、おじさんが営む本屋辺りにもくもくと雲が上がっているのを見て、そこへ急ぎます。しかし、その道中で、皮膚がべろんと垂れた人、顔が腫れ上がり、髪の毛はこげ、幽霊のようにふらりふらりと歩いている人、早く楽になりたくて殺してくれと頼む人たちを目の当たりにし、山本さんは死ぬ手伝いをしました。その時の様子を地獄だと表現しています。

終戦後、山本さんは、おじさんの本屋のあった場所を見つけ、おじさんのうらみと怒りの形見として故郷におき火を持ち帰りました。広島は「うらみと怒りの形見」という言葉が多くの心に突き刺さりました。山本さんのように、自分がけがをしていなくても、長い間心に傷を負って生きていた人、自分の大切な人を亡くして原爆をうらんで生きていた人がいたという事実を知ったからです。何かをうらみながら生きていくことはどんな感じだろう。ぼくには想像もつきません。山本さんは火をずっと家で守り続けているうちに、「うらみはうらみをうみ、戦はくり返される。戦をなく

すことしかない。」という気持ちが生まれました。うらみ・怒りの火から、戦争をなくす願い・祈りの火へと変化していったのだと感じました。山本さんのそんな気持ちがぼくの胸にずしんとときました。

「これなんだ…。」

平和記念式典や黙とうは、その時に亡くなった人や原爆が原因の病気で亡くなった人の冥福を祈るとともに、平和を願いつける気持ちを新たに刻むために行われているんだ。七十二年経った今も、そしてこの先も、現代を生きる原爆を知らないぼくたちが事実を伝え続けていかなければならないんだ。平和を願う気持ちを続けなければならぬんだ。山本さんにそう教えてもらい、ぼくの心にも火が灯りました。ぼくにできることをしたい、そう強く感じました。本を読み、戦時中に生きた人や戦争について知りたいです。それから黙とうも、うすぐ校外学習で平和記念公園に行きます。今までできなかった、本当の意味での黙とうをして来ます。

山本さんが守り続けた原爆の火がこれからも平和の象徴として灯り続けますように。いいえ、ぼくたちが灯し続けていきます。

※読んだ本「原爆の火」

岩崎 京子（新日本出版社）

★中学校の部

私 の 時 間



益田中学校 2年
平田 萌 さん

「時間がない」「ひまがない」と誰もが口に出したり、思ったりしたことがあるはずだ。私もその内の一人だ。でも、ただ忙しく過ぎていく毎日を何気なく過ごすだけの私がいる。この物語は、その時間をテーマにしている。

主人公のモモは、年齢もどこの誰かも分からない浮浪児の女の子。でも、モモには「相手の話を聞く」という能力があった。簡単そうだが、意外に相手の話にじっと耳を傾けることは難しい。

私が一番に感じたのは、「時間があるからこそ、生きることが楽しい」ということだ。時間があるから、友達とおしゃべりすることができると、食卓で家族との会話もはずむ。読書や、食べることに、一人でゆっくりする時間、ぐっすり寝ること。時間があれば、何でもできる。時間さえあれば、できることが増える。もし一日が二十四時間以上あれば、ピアノの練習もできた上に、お風呂にもゆっくり入ることができる。やりたいことを一週間のうちに割り振らなければならない

煩わしさがなくなるといふことだ。時間があるからこそできる幸せが、私の日常にはないのだ。

私が人間関係に悩んだ時、話を聞いてくれる友達がいって、心が楽になった。友達はずきながら共感してくれ、アドバイスをくれた。私はそれが嬉しかったし、話を聞いてもらったことで不安なことを吐き出し、安心できた。そんなふうに関わりの気持ちや心の中の本当の思いを聞いてあげることが、モモにもその友達にもできていた。簡単ではないが、悩んでいる人がいたら、相手の心の中の思いをよく聞いてあげること、モモのように私を助けてくれた友達のように、力になってあげたい。そして、そんな時間を大切にしたい。自分の時間を相手のために使いたい。

しかし、町の人々はそんな大切な時間を時間どろぼう、灰色の男達に盗まれていく。大人は仕事、子供は勉強のため、時間節約を強制されてしまう。それはまるで、今の私のような。その町のように誰もがせかせかしているわけではないけれど、学校やテスト勉強、習い事、テレビを見ている間に、友達と遊んでいる間に、いつの間にか時間は毎日飛ぶように過ぎていく。

小学校で日直の時に、回ってくる朝のスピーチで「私にとっての時間」のスピーチをした。「宿題もある。習い事もあ。テレビも見たい。友達とも遊びたい。」だから、私にとっての時間はとて

も短いのだと。忙しくて、やることがたくさんあってゆったりとする時間が小学生の時からなかった。そのスピーチで最後に「時間が長いなと思うのは、おばあちゃんになった時かな。」と話している。おばあちゃんになると、やることがないからだ。でも、おばあちゃんになるまで待てない。だから、私は小学生から今の今まで、こう願っている。「時間が増えますように。」と。

それは、灰色の男達に誘惑される町の人々と同じ願いだ。もしも、灰色の男達がいたのならば、私は男達に時間を盗まれていただろう。灰色の男達は、いつでも、どこでも自分自身の心の中にいるのかもしれない。いつ、灰色の男達に私が支配されるか分からない。私の中の灰色の男達が、嫌気のさすテスト勉強をほったらかしにする。そして、結局は、後悔をする。それはすべて自分のせいなのだ。私は、灰色の男達の誘惑に負けることなく、自分に厳しく、今の時間を大切に使用していきたい。小学生の頃から願っていることも決して叶いはしない。みんな与えられている時間は同じなのだから。だから私はそうではなく、「おばあちゃん」になるのを待つのではなく、今の時間を大切にしたい。

後書きには、「私はこの物語を過去に起こったことのように話しましたね。でも、それは将来起こることとしてお話ししてもよかったですよ。どちらでもそう大きな違いはありません。」と書いてあ

った。つまり、私にとってこれは、過去の物語ではなく、未来のことかもしれないのだ。そして、今の私の現状かもしれない。

時間、それは人生だと思う。「人間というものは、一人一人がそれぞれの自分の時間を持っている。そしてこの時間は、本当に自分のものである間だけ、生きた時間でいられるのだよ。」これは、時間をつかさどる者、マイスター・ホラの言葉だ。自分らしく生きなければ、自分の生きた時間にはならないということだ。他人ではなく、自分が決めた人生を歩めば、「生きること」ができると思う。自分の時間をどう使うかは、自分自身が決めることだ。

私の大切な時間。その時間を周りの人と関わる時間にしていきたい。ケンカして仲直りして、しゃべって、笑って、泣いて。そして、できたら一日数分でもモモや私を助けてくれた友達のように人のために使いたい。そうすることで、私の生きる時間、私の人生が楽しくなるはずだ。

※読んだ本「モモ」
ミヒヤエル・エンデ（岩波書店）

★高等学校の部

一緒に、しませんか。



益田翔陽高等学校2年
下馬庭 智加さん

この本の『認知症の私からあなたへ』という題名を見て、思わず手に取りたくなりました。なぜかというところ、自分は認知症であるということとオープンにしているからです。認知症と診断を受けて十年の佐藤雅彦さんが、私たちに伝えたメッセージとは何なのでしょう。

認知症ときくと、物忘れが多いことや家族の支援が大変等と、どちらかといえばマイナスのイメージを持っていました。しかし佐藤さんは「認知症になって人も人生を謳歌できることを、私は身をもって示したいと思います。」と断言しています。この言葉には、佐藤さんの認知症に対する前向きな姿勢が表れています。

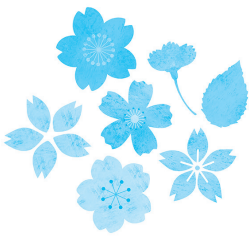
認知症になると一人暮らしは難しく、家で暮らし続けるには、家族の適切な支援が必要です。それが難しい場合、施設に入って生活する方が多いのです。しかし、施設に入ると今までと同じような自由な生活はできません。佐藤さんは一番不安要素が高く、負担の大きい一人暮らしを選択しました。やはり、一人暮らし

の生活は簡単ではなく不便なことが多かったようです。しかし、佐藤さんは独自の知恵と工夫で乗り切ってきました。認知症になったら全てが終わりではなく、本人の工夫でよりよい人生を送ることができると知り、認知症への考え方が変わりました。

しかし、工夫をすれば全て完璧にできるといってわけではありません。誰にでも周囲の支援が必要なきはあります。もし、私の周囲に困っている人がいたら、「してあげましょうか」と、声を掛けることでしよう。でもそれは、相手に負い目を感じさせない方がいい方になっていくのかもしれない。佐藤さんは「してあげる」より「一緒にくしましょう」と言ってもらった方が嬉しいのだと教えてくれました。

私の曾祖母も軽度ですが、認知症と診断されました。買い物のために外に出るのは大変だろうからと、これまでの私は必要そうなものを買って行ってあげていました。そうではなく、買い物に誘い、「何を買いたいの？あっちの棚に〇〇があったよ。」など会話をしながらその場で手助けをし、一緒に買い物を楽しむ方が本当は曾祖母も喜んでくれたのかもかもしれません。

周囲の人が知識から得た支援ではなく、「一緒にする」という姿勢になればなるほど、認知症の方の生活はより豊かなものになっていくのではないのでしょうか。



ところで、本人への質問を介護者に聞いたり、また、本人の代わりに介護者が答えたりしてしまう場合があるようです。そこには、認知症の方の存在は無視されています。佐藤さんはそのことに對し、「認知症になっても、思考や感情は失われません。ただ、すぐに判断したり、すぐに言葉にしたりすることができないだけなのです。」と言われます。私たちはこのことを本当に理解しているのでしょうか。

質問の答えが遅くなることもあるかもしれませんが。しかし、質問する側が選択式の質問に変えたり、急かさず答えを待たたりすることで本人が自分の意思を伝えることができます。自分のことは自分で決めたいという思いは誰にとっても同じです。それを認知症だからといって奪うのではなく、質問する側が工夫をして個人の尊厳を守ることの方が大切なのです。

私は将来、地元に残り、看護師として働きたいと思っています。実習で地元の施設や病院に行ったとき、多くの認知症患者の方に出会いました。私は、そんな方々の支えになり、この人に出会えて良かったと思ってもらえるような看護師になりたいです。そのためにも、まずは誰に對しても本人の思いを尊重することを大切にしたいです。

認知症は誰でもかかる可能性がある病気です。いつ自分の周りの人が認知症になるかわかりません。これから高齢化社

会になるにつれ、認知症の方も増えてきます。他の疾患で入院している方が認知症を患っていることもあると思います。この本を読んで、自分や周りの人が認知症になったとしても、前向きに豊かな生活を送るために必要な関わり方、気持ちの持ちようを知ることが出来ました。介護支援や病気についての知識ばかりに目を向けるのではなく、それ以上に、支援を必要としている人の思いを知り、「一緒にする」という姿勢で接することの方が大切だと気付きました。

たった二十のメッセージでしたが、様々なことが学べたのは、佐藤さんが「認知症と共に生きていく」方だからこそ、その言葉に重み、真実味があったからだと思います。認知症という病気と向き合っている、その中で人の役に立ちたいと思ったり、様々なことにチャレンジする姿に、私がかねがねすべきことのヒントと夢の実現のための勇気ももらいました。

※読んで本「認知症の私からあなたへ20のメッセージ」

佐藤 雅彦(大月書店)



第6回 益田市景観シンポジウム / 島根県立大学と益田市との共同研究事業成果発表会 合同開催

『まち並みづくりとにぎわいづくり～活かそう！地域資源～』

益田市では、「益田らしい景観」を守り、創出し、次世代につなげていくため、益田市の景観について、市民・事業者・行政がその価値を共有することを目的に、これまで5回の景観シンポジウムを開催してきました。今回は地域資源を活かした景観まちづくりとにぎわいの創出について理解を深めるため、「まち並みづくりとにぎわいづくり」をテーマに、島根県立大学と益田市との共同研究事業成果発表会と合同で景観シンポジウムを開催します。

シンポジウムにあわせて、第6回益田市景観賞の表彰式および応募作品の展示を実施します。多くの方のご来場をお待ちしています。

開催日時：2月3日(土) 13:00～16:30 (12:30開場)

場 所：市立市民学習センター 多目的ホール

内 容：第1部 ●第6回益田市景観賞表彰式

景観賞表彰式および選考委員会委員長講演

第2部 ●地域資源を活かしたまちづくりがにぎわいをつくる
～島根県立大学と益田市との共同研究事業成果発表～
島根県立大学総合政策学部 久保田典男研究室

第3部 ●パネルディスカッション『まち並みづくりとにぎわいづくり』

コーディネーター：福原 あさみ 氏 (益田市観光協会)

パネリスト：久保田 典男 氏 (島根県立大学准教授)、岩井 賢朗 氏 (有限会社真砂)

田中 淳央 氏 (有限会社万設計)

友重 明美 氏 (益田市景観ワークショップリーダー育成講座修了生)

問い合わせ先：市都市整備課景観係 ☎ 31-0352 / 市産業支援センター ☎ 31-0341



入場料：無料
※要約筆記あり